AV資料の当館における現状と将来; 整理手法の実例報告

AV-materials Status Quo and the Near Future in Our Library; A Case Study

井 上 英 新*・馬 場 南美子*

東邦大学医学部図書館

Abstract : In this electronics age, we medical librarians, as well as medical educators and paramedical technicians, are facing with the bewildering and beguiling array of new electronic devices including AV-materials, which are remarkably useful for storage, transmission, and retrieval informations needed. For the first stage of understanding AV-materials, we have already known that it is almost impossible to continue medical education without an aid of AV-materials, however, AV-materials are not self-sufficient magic aids in education.

In the last few years increment of AV-materials was conspicuous in our Library, Toho Univ. School of Med.. The authors think that this is not only in us but a general trend in the Japan Medical Library Assn.'s membership libraries as it's Annual Statistics reveals.

We are now facing at the second stage, which imposes us two assignments. 1) Who should take care of the new materials? Whether we should divide "Learning Resources Center"-function from the present library system as it is seen in Health Sciences Libraries, U. S. or we should embrace the two functions. Then, 2) How and what should we do for its effective use? Described here includes our case study about its acquisition, cataloging, and circulation.

目 次

I 総 論

1. AV資料の範囲と特徴
2. AV資料の普及と各国事情概観
3. AV資料に関する当館の方針

II AV資料の整理について

1. 受入れから目録まで
2. AV資料の種類
3. AV資料整理の実際

III AV資料の利用について

1. 管理
2. 利用

IV AV機器について

1. スライド・プロジェクター
2. スライド作成機
3. ビデオ・テープ・レコーダとテレビ
4. マイクロ・リーダ・プリンター
5. その他の機器

V まとめ

I. 総 論

“日本では何故VTRが普及しないか”(三浦, 1975)と題する論説が雑誌「医学教育」⁸⁾に発表されて5年経過した。しかしながら視聴覚的教育方法は一見不毛かと思われた我が国医学教育界にも、どうやらこの状況に変化の萌が現れたようなのである。少くとも医学教育界の一端に位置する医学図書館の現場においては、VTRを

* Eishin INOUE, and Namiko BABA : Toho University
School of Medicine, Library, Omori-Nishi, Otaku,
Tokyo 143 (昭和55年2月20日 受理)

含むAV資料 (Audiovisual-materials) が普及段階に至りはじめていることが、ほぼ明らかになるのである。たとえば当館ではVTRを中心にAV資料が急増している (直接の理由はAVおよび学生用指定図書購入のため、2千万円の特別予算——3ヶ年計画全期の総額——が認められたためである)。

AV資料の増加は当館特有の現象ではなく、他の医学図書館においても見られる。日本医学図書館協会の統計⁹⁾によれば、1977年度 (この年から同協会刊行の年次統計にAV資料に関する調査項目が記載された) から79年度の2年間に、16mm映画からマイクロ・フィルムに至る5種類のAV資料について、協会加盟の63医学図書館において顕著に増加している (図1)。スライドは倍増し、ビデオ・カセットの場合は調査初年度が僅少だったせいもあるが、10倍に増加している。ただしAV資料に対する関心の差が決定的に作用し、各医学校 (図書館) あたりの増加度は駁行的である。当館以外の各医学図書館におけるAV増加の具体的な理由については未調査であるが、基本的には、AV資料が医学教育に有効かつ重要であるとの理解が、徐々にではあるが各医学校の教育陣のあいだに浸透しつつあるためと考える。

前記の論説で三浦⁹⁾は、我が国医学教育の現状は、さすがにスライド利用は定着しているものの、講義やカンファレンスが依然として黒板中心であり、VTRを先駆的に採用した医学校においても、放映観覧用の利用にとどまるとしている。著者はまだ、一般に視聴覚的手法が教育上有効であり、神経疾患や皮膚科学のほか解剖学、生理学の講義にVTRが利用できるとして、神経内科学の入門に関する卒後研修カリキュラムにVTRのプログラムを用いた後、アンケートを行った結果を述べている。それによれば、視聴覚的手法が理解を助けるのに役立たないと答えたものは55名中1名もなく、きわめて適切と答えたもの78%、適切が22%であった。

このように有効であるにもかかわらずVTRが普及しない理由として、著者の結論は“hardwareのせいではなく、softwareとそれを利用しようとする教師のがわに問題がある”としているが、筆者らも同意見である。

AV普及の阻害要因は克服されつつあり、漸次普及の段階に入ってきたのである。このことは計らずも図書館側にとり、資料運用の面を中心に新たな問題を課されることになったわけである。たとえばこれらの新しい記録媒体 recorded communication media の中には、司書の側にもはじめて耳目にふれたものもあり、こうした

図1 JMLA加盟63医学校における過去3年のAV資料増加

new media の収集・管理・運用のための機関をどこにするのかについても、未だ検討を要するものがある。図書館が1000年来の活字媒体とのつきあいによる経験を活かしてこれらを扱うにも、その取扱い方法について、図書館側に整備された手順や機構がすでに確立しているとは云い難い状況がある。新たに登場した見なれない資料、AV-materials の受入れにあたり、図書館界はとまどいとためらいののち試行錯誤の実験期にあると云ってよいであろう。

以下の小論では、まず1) AV資料の具体的な範囲について、整理実務担当者のための実際的な定義を行い、2) 各国におけるAV資料の扱い方や趨勢を概観し、3) 当館ではその活用のためにAVをどのように位置づけ、ど

表1 Relation between AV-media and Library's conventional media

のような姿勢で受けとめようとしているのかを述べ、4) 当館での整理の実例を報告し、最後に近い将来でのAV資料の受入れから管理までの望ましいあり方についてふれることにしたい。

1. AV資料の範囲と特徴

従来の図書館資料は伝統的に活字媒体が中心であった。図書館資料とは記録された資料 recorded information にほかならず、そしてそれは伝達媒体 communication media の一形態であって全形態を意味したわけではなかった。我々が行う外部環境とのコミュニケーションは、本来五感 five senses of organ によっているのであり、それ自身では伝達行動が不可能な味覚、嗅覚をのぞき、視覚、聴覚（言語の発声と聴取）、および触覚に対応する三種類の伝達が可能な管であった。しかし現実には可能であったのは文字や絵画という視覚依存の媒体のみであったため、記録された資料（＝図書館資料）とはとりもなおさず文字や数字のごとき記号体系のみを意味したのも当然であった（表1）。

ここにきて近年の電子工学はじめ諸科学の発達、我々に種々の代用感覚器官を提供し、人類ははじめて聴覚領域に属する音声情報の記録と再生手段をも獲得した。これはコミュニケーション史上、画期的なできごとであった。いま、1980年代初頭の今日ふつうに入手できる記録媒体を感覚器官を核として図示すれば、次図のようになる（図2）。

図において等心円の外輪帯に属するものは、ひとまず

いちばん外枠の輪帯内のメディアがAV資料
 ※黒岩（1974）図を参考に作成した

図2 記録メディア（AV資料）と三感管

視聴覚教材と称することができよう。AV資料の実際的な定義としては、「機械的手段を媒体に視・聴・触の三感管を通じて思想・感情・意志を伝達するための教材」である。広義には、機械的手段によらない教材（e.g., 掛図、掛地図、写真、図画、理科用模型など）も含めるべきであろう。ただし印刷された記号体系による記録媒体（図書・雑誌等）は除くため、AV資料＝非印刷資料 non-printed material と見ても大きな誤りではない。これらのAV資料に共通した管理運用面での特徴は、1) 映写機とフィルム、オーディオ・カセットとそのプレーヤーのように、機械と資料(或は hardware と software)、

という対関係になっている点、2) 形態的特徴としては図書資料が冊子状という単一形態に統一されているのに対し、大きさ・形態・操作方法が多様である点である。ここに整理、運用上の問題点が生ずるのであるが、詳細は各論にゆずることにしたい。

2. AV資料の普及と各国事情概観

はじめに問題点として指摘したように、大学がAV資料を教材として組織的に採用しようとする場合、その収集・管理・運用を誰（学内のどの機関）がなすべきかの問題がある。各国ではどのように行われているであろうか？

主としてヨーロッパの図書館では、フィルム、レコード、ビデオカセットなど非印刷物資料の取扱いを“メディアセンター的機能”として、図書館の果すべき新たに付加された業務と見なされているようである。韓国の場合、筆者の一人による文字通りの瞥見であった(1978年)がソウル市郊外延世大学医科大校図書館では、館内にAV資料専用の一室を設けて視聴覚技師の肩書きをもつ専任職員(1名?)を配属させていた。目立った hardware では簡易キャレルの個席ごとにスライド・トーキー(スライドと解説録音テープの同調機器)が備えられていた。

一方、図書館がその業務の一部としてAV資料を業務的に扱うことに否定的な意見¹⁰⁾がある。ライブラリアンである著者は米国カリフォルニア州の学校図書館の現状について、以下の理由をあげてメディアセンター機能の図書館からの独立を主張している。すなわち、1) 教師中心の指導法ではなく、生徒中心の指導法 learner centered method を選ぶ以上、AVのしめる位置は教壇上の教師からの一方通行時代とは比較にならず、図書館の兼務では処しきれないこと、2) ほとんどの図書館学校にはAVコースをカリキュラムに入れることを考慮しないし、好んでもいないことを挙げている(筆者の反論として、医学図書館界にかぎって言えば MLA Annual Meeting, 1979のCEコースを含む約50セッションのうち、14はAV関係のプログラムであったことを付記しておきたい)。著者レンツ女史のこの主張の背景として、AV教育の有効性を評価した米教育界では、1965年以降初等・中等教育法により学校図書館にAV設備のため政府補助金が提供されるようになった事実がある。また同じ頃、1964年には後述する Medical School Library のためのガイドラインが発表されたように、AVが市民権

を得た時期という事情もある。結果として教材売込みのためのメディア会社の狂奔現象が起り、利用面では教育メディア・ジェネラリスト educational media generalist (教員免許、司書免許と同格)の資格制度に発展したのである。

ともあれ、概観するところこの方面で最も先進的である米国での趨勢は、図書館とAVセンターとが分離する傾向のようである。ただし日本の縦割タコツボ式ではなく、相互連繋のうえで機能上の分離であり、名称としては Learning Resources Center (LRC) が最も一般的で、メディア・センターというのも勿論あるようである。いま Medical College of Virginia Campus, Virginia Commonwealth University (MCV/VCU) の場合⁹⁾を見ると、同大学は医学校と歯学校のためそれぞれ一つずつ計二つのLRCの施設を有し——The Sanger LRC (for medical students), the Lyons LRC (for dental students)——、1966年の創設である。以下にthe Sanger LRCの概要を示すと、

機構：Visual Education Dept. (VED) に所属。

面積および収容人員：

2,700-ft²(≒15×15m)、個席20、Cluster carrels (ループ学習用) 坐席50、合計70人収容。

予算：1970—77までのところ、年間5,000～*7,000ドル(*250円換算では175万円相当)。

設備：二つのLRCの合計であるが

カルセル・プロジェクター	75台
オーディオ・プレーヤー	12台
VTR	9台

職員：専任司書1名(図書館との連絡にあたる)、司書補1名、事務職員1名、アルバイト2、3人(全員学生、土曜・夜間開館の場合の補助員)、ほかに生物医学各種情報担当専門員 biomedical communications specialist が1名 VED に所属して、LRCとの緊密な接触を保つ。よって正職員は3名。

目録：全資料はカード・カタログ化され、MeSHにより subject heading が付される。指定AV資料は分類されず、解剖、眼科などの教科目と所在位置とを示す書架番号が付される。なおこのLRCには指定図書も備えてあるが、本館 Tompkins Library 同様LRCの分類表により分類される。

では the Sanger LRC はどのような運営、利用がなされているのだろうか。そもそもこの二つのLRCは

Medical College of Virginia Campus/VCU の中心的図書館である Tompkins McCaw Library から分離してできたものであり、VEDに属するスタッフと教授陣との協力による教材製作とその改訂を行っている。ちなみに1976年の実例によると利用されるAV資料の85%は同大学VEDの自作資料であり、授業で用いられるものである点興味深い（逆に云えば、アメリカの学生も大部分は授業で要求されないものには手をふれようとしないうということでもある）。

利用統計によると、過去6年間着実に増加の途を辿っている。学生総数の増加率10.5%に対し、利用した学生数は299%と3倍近い増加率である。資料のmedia別利用度では、スライド利用が72.4%で最高である。これは所蔵資料の形態別構成比の反映にすぎないように思われる。

利用に関するもう一例をあげてみよう。Univ. Southern Calif. (USC), Norris Medical Library 所属の開設まもない Crenshaw LRC の最初の年次報告²⁾によれば、設備の増強と所蔵資料の増加——特に、カリキュラム中に組入れられた指定AV資料——のためもあるとしながらも、利用点数は前年比104%増という注目すべき数字を発表している。

概略データ：

貸出点数：11,361点/年

媒体別利用率：	ビデオ・カセット	—55%
	スライド	—33%
	オーディオカセット	8%
	その他	—4%

3. AV資料に関する当館の方針

各国の状況は以上までに概観したとおりであるが、では誰がこの新奇な見なれない資料——非活字媒体——の収集から運用までを引受けるべきか。この問題にどう当館は対処すべきなのであろうか。現実的解答の可能性については以下の三つの選択肢が考えられよう。

a) 活字媒体についてのこれまでの経験を活かして図書館が行う、b) 図書館との緊密な連繫のうえで専任機関としてLRCを新設してこれが行う、c) LRCと図書館とが平行的に分担して行う。

1965～70年頃の米国におけるAV資料の状況が我が国の将来を先どりして見せてくれたのだと仮定すれば、我が国においてもLRC的機関が図書館から分離というかたちでか、或は独自に新設というかたちで出現する傾向

になると云えるかもしれない。

ところで当館の親機関である東邦大学医学部では、たまたま長期計画による学内の増改築工事が間もなく一段落する予定であるが、同計画により標本展示館（仮称）の構想が検討されている。それによると病理や解剖の標本だけでなく、まだ利用規則等の具体的運用法が論じられる段階に至ってはいないが、AV資料の取扱いもその活動業務の中で想定している。

これが本学におけるLRCの萌芽であるとすれば、当館は期せずしてb)の行き方をとることになる。しかしながら、建物の新設は易く新機構の運営発展は難い。真に本構想の成功を期すには、AV的教育手法への全教育陣の理解が不可欠である。またLRCにはAV資料を扱うにふさわしい資質、資格を備えた専門職員を要するのであるが、資格制度に関しては、肝心の司書職制度さえ確立していない目下の我が国ではないものねだりというべきで、今後の慎重な検討が必要であらう。

1964年、米国のAAMC (Assn. Amer. Med. Colls.) と MLA (Med. Libr. Assn.) との協同委員会により作成された Guidelines for Medical School Library の第113条³⁾には、医学教育上のAV資料の重要性を説いたのち、その取扱い機関について次のように述べている。

「これらのAV資料類は、学内において効率よく行っている機関が他にない場合、その発注、受入れ、運用は図書館が行うべきである。資料の選定、除籍等についても、図書資料の場合と同様、高度の諸規準を適用すべきである……」

この節における結論として、本学では上記の米国医学図書館ガイドラインの勧告の線に沿って、医学部図書館がAV資料の収集・管理・運用を行う方針である（したがってこの時点ではa)の選択肢を選んだといえる）。しかしながら、本学の標本展示館（仮称）がLRC的發展を将来迎るのであれば、当館（医学部図書館）と標本展示館（仮称）とは、AV資料の収集・管理・運用面で分担的共存関係に入ることになるものと思われる。これは利用者である教員・学生側から見れば、カリキュラムに従った授業におけるAVの集団利用は標本展示館で行い、個別的自主的利用は図書館で行う、という具合である（c)の選択肢に概当。このばあい、収集管理面からみて資料の一部重複受入れも発生することになるが、これはいわば必要悪と考えたい。

してみると、当館はとりあえずa)を選び、発展段

階に応じつつ最終段階ではc)に落ちつく計画であるといえる。では次に、整理の実際面について報告したい。

II. AV資料の整理について

AV資料の整理方法について当館での実際を記述していくにあたり、まず選定について述べるべきであるが、図書の場合と大いに異なり、AV資料の選定についてはほぼ全面的に教員・研究者側の要望に従い、重複調査のほかは事務的な発注業務を行なうのみである。教員・研究者による選定に対する図書館員側の協力援助に関しては、後に述べる予定の“目録リスト作成のすすめ”でもふれることにしたい。ここではまず受入れ登録から分類、目録までを順を追ってその全般的な取扱いを記し、その後AV資料のmedia別に、より詳しくとりあげる予定である。

1. 受入れから目録まで

1-1 受入れ・登録

AV資料の受入れにあたっては、その資料に用いられている言語やmediaの種類による区別はしない。「AV」記号を付した登録番号を与える。ちなみに当館での図書資料(図書、逐次刊行物)の受入れは、資料の記述言語により和と洋に区別して登録している。また、スライド等は1タイトルを1単位と見なして、1コマ、或いは1カセットごとの登録はしない。いたずらに複雑になるばかりで、利用上のメリットは期待できないと考えるからである。なお、スライドの附録的単行書(資料に附属した「テキスト」又は「解説書」と見なすよりも独立した単行書扱いがより適わしいと考えられるもの)については、そのスライド版とは分離して、図書として登録している。例えばSobottaの“Atlas of human anatomy”など、すでに図書として受入れしているものなどがこの例である。

1-2 分類

分類は日本十進分類法に準拠し、図書と同一分類体系をとっている。ただし図書資料と区別するために、請求記号にAVの記号を付与している。同一分類体系をとることにより図書との連絡が出来る利点があると考えられる。

1-3 目録

図書資料の場合と同様、AV資料についてもカード目録を作成しているが、目録規則はNLMAC(NLM Audiovisuals Catalog)に準拠して、タイトルの次にmediaの名称を補記している。タイトル、著者、分類の各目録

カードを作成し、学内各機関(大橋病院図書室、大森病院図書室〔仮称、設置準備中〕、各研究室)のAV資料とあわせて一本にファイルしている。

2. AV資料の種類

AV関係の資料は現在も多種多様のものが出まわっているが、将来はさらに新しいタイプのものが出現し、受入れされることになると思われる。が、目下のところ当館では以下のmediaを受入れの対象と考えている。mediaの名称(カード目録で補記する統一名称)についてはNLMACに従って以下()に記した名称を用いている。

- a. フィルム・ストリップ (Film strip)
- b. スライド (Slide)
- c. マイクロフィルム (Microfilm)

現在 rolled film と microfiche の2形式が流通している。

- d. トランスペアレンシー (T.P. Sheet)

オーバーヘッド・プロジェクター(OHP)で使用するセルロイド状の透明シートである。市販の教材として印刷されたものが登録の対象となる。

- e. オーディオ・カセット (Sound recording)

NLMACではいわゆるカセット・テープやオープン・リールのテープも、この名称で統一している。

- f. 映画 (Motion picture)

8 mm, 16mm等の映画フィルム。

- g. ビデオ・カセット (Videorecording)

ビデオ・カセット・テープである。

VTR, VCRは本来ハード・ウェアとしての機器に対する名称であるが、一般にはソフトとしてのビデオテープの意味にも、更にその両者の意味にも使われることが多い。テープ巾1/2インチ(当館では不所蔵)と3/4インチのものがある。

- h. レコード (Discrecord)

LPなどのレコードの他、フオノ・シートなども含める。

この他にも、実物標本や模型の類もあるが、これらは近い将来、本学に設置予定の標本展示館(仮称)の方にまとめて受入される予定であり、図書館資料と幾分か離れるので、ここでは言及をさける。

次に、上に掲げたmediaについて、当館で受入れ件数の多い、スライド、マイクロフィルム、オーディオ・

参考までに当館所蔵資料のデーターを以下に掲げる

表2 当館(東邦医大)AV資料現有一覧

Media別	所蔵別	図書館(本館)	大橋分室	大森病院	各研究室(計)	計
スライド		34巻(5,619枚)	16巻(1,616枚)	39巻(3,931枚)	64巻(6,175枚)	153巻(17,341枚)
マイクロ・フィルム (16mm)		(2,872点)			9点	2,881点
オーディオ・カセット		16巻(86点)			3巻(47点)	19巻(133点)
〃 (スライドの付録物)		1巻(1点)	15巻(31点)	39巻(76点)	47巻(60点)	102巻(168点)
映画		2点			9点	11点
ビデオ・カセット		13点	12点	171点	1点	197点

(11.20.79現在)

カセット、映画、ビデオ・カセットについて少し詳しく説明したい。

3. AV資料整理の実例

3-1 スライド

現在、市販されたり自動スライド作成機で作られるスライドは、外枠(マウント)が2インチ×2インチ(5cm×5cm)のものが主流である。

整理にあたっては、1コマを単位とせず、1タイトルを1つの単位として登録し、目録カードにはコマ数、外枠の大きさ、カラーが白黒かの表示をする。

例：外枠5×5cmのカラー・スライドが100コマの場合

100-slide: 5×5cm (2×2inch); col.

最近では、スライドと同調して使用するオーディオ・カセットも付録としてついている例が多い。この場合はスライドの付属物として扱う。目録カードでの表示方法はオーディオ・カセットの記述に準ずる。

3-2 マイクロ・フィルム(Microfilm)

当館では、主として逐次刊行物のバックナンバーをマイクロフィルムに撮影し、現像からマガジン(フィルムケースのこと)装てんまでを自館で作製しているので、AV資料のうちでも、特に受入れ数の多いmediaである。この場合は、逐次刊行物のマイクロ版として受入れ整理している。目録カードには、1タイトルを1単位として、マガジン数、フィルムの巾、カラーかどうかを表示する。

例：モノクロで16mmのマイクロフィルムのマガジンが1個の場合

1 cassette: 16mm; b & w

3-3 オーディオ・カセット(Sound recording)

録音テープにはオープン・リール式、カートリッジ式(カー・ステレオ用のカセット・テープ)、カセット式があるが、最近の当館受入れに見るかぎり、カセット式が圧倒的に多い。音楽録音で音を重視する場合は、未だオープン・リールの方が優勢のようであるが、医学研究資料としては、カセット式が利用し易さなどの点から最も多く利用されている。録音テープの整理はスライドの場合と同様、カセット1コを単位とせず、1タイトルを1単位として扱い、その録音テープがスライドなどの付録物の場合は、スライドも本体に付けて整理する。また解説書がある場合も付録として扱う。

例：1タイトルのもとに2コのカセットと1冊の解説書がついている場合。録音時間(min.)は総時間数を記す。

2 cassette: 4 track 2-channel; 120min. 1-text

3-4 映画(Motion picture)

教育・学術研究用の映画は市販のものも、個人又は研究室単位で作成するものも、いずれも8mm版と16mm版が主である。医学研究用にはほとんど16mm版のようである。この場合、リール数*、フィルムの巾、上映時間、音が入っているかどうかを目録カードに表示する。

(* 1タイトルを構成するリールの箇数)

例：16mm版のカラー映画で30分もの、音入りの場合

1 reel: 16mm; 30min; col; sd

3-5 ビデオ・カセット(Videorecording)

今後、受入れ数の多くなるAV資料としては、いわゆるビデオ・テープが第一にあげられるであろう。テープ巾は1/2インチ(いわゆる家庭用)と、3/4インチのものが市販されているが、学術用のものとしては画面の大きさ、色調等の点で断然後者が適している。当館では3/4インチのものを受入れ、録音・録画・再生装置もこのサ

イズのものをそろえている。これに関連する機器としてダビング・マシン（複製機, duplicator ともいう）がある。このようなハードウェアの購入にあたっては、複製にともなう著作権問題をはじめとする諸問題に十分留意することが必要である。たとえば産婦人科など臨床医学のビデオテープ（ソフトウェア）購入の場合でさえ、輸入港の税関長あてに誓約書の提出を要求されることがある。この場合誓約書には、医学生医療関係者を除き一般公開の禁、複製の禁、譲渡の禁のほか管理責任者の設定などを求められる。なお、カセット・テープの場合にも同様に必要な注意であるが、録画を誤まって消去しないために、ツメ又は赤キャップをそれぞれ折るかは必ずなど、消去防止の処置が必要である。通常、購入時にすでに処理されているが、受入時点での整理担当者による再確認が望ましい。目録カードの作成にあたっては、1タイトルを1単位として扱い、カセット数、テープ幅、上映時間、カラーかどうか、また音入りであるかどうかを表示する。

例：3/4インチのカセットが2個のビデオ・テープで、
総上映時間が75分、カラーで音入りの場合
2 cassette; 3/4 inch; 75 min; col; sd.

III. AV資料の利用について

1. 管理

AV資料は各 media によってその形態が異なり、図書のように書架に並べると不都合な場合が多いが、出来るだけ図書の形に近い形態にして、利用しやすいようにつとめている。

例えば、スライドはボール紙の小箱につめられて市販されている場合が多いが、これをスライド・ファイル（スライド20コマを1シートにおさめるもの）を使って、ブック・フォームのバインダー（10シートが1冊分のバインダーにおさまる）に入れ、貸出カード等の装備をしている。またビデオテープは、外箱に貸出カードを付けAV資料コーナーの書架に配架している。AVコーナーは管理の目がとどき易いように、カウンター近くに設定している。

2. 利用

図書や逐次刊行物の場合と同様、館内閲覧・館外貸出をしている。但し、これらの資料を再生する機器の利用は、館内および学内利用のみで、学外への貸出はしていない。貸出・返却のさい、貸出担当者のチェック事項

として、カセット・テープ、スライドの個数確認を励行しているので、紛失はごく少ない（借りた時点ですでに無かったのかどうか、現在係争中のが一件ある）。またカセット・テープ、ビデオ・テープが返却された場合、録画消去防止のためのツメやキャップに悪意の工作がしてないかどうかのチェックも、時に必要となろう（動機は不明だが、借り出した録画を消去するためツメやキャップを故意に補てんする異常な利用者が稀にあるらしい。幸い当館では未発生である）。

IV. AV機器について

AV資料の多様化に対応して多種種類の機器が必要であるが、現在当館で所蔵している機器について言及しておきたい。

1. スライド（サウンド）・プロジェクター

スライド上映のためのプロジェクター1台と、カセット・テープを同調させて視聴できるスライド・サウンド・プロジェクター2台を所蔵している。目下のところはAV資料室が未完成なので、図書館付属のセミナー・ルームに設置し、利用者自身によるセルフ・サービスにまかせている。機器の貸出しも学内にかぎり行なう。

2. スライド作成機

印刷資料等から5×5cm枠付のスライドを自動的に作成するスライド作成機を1台所有している。これは白黒スライドであるが、ブルーバックのスライドに転換する装置も所有している。この機器の使用も利用者自身のセルフ・サービスにまかせている。学会シーズン前や、学生の病理学等実習時期に多く利用されている。利用にあたっては、学内各方面の需要が多いので、同種の設備を有する附属大森病院フォト・センターや、大橋病院図書室とも料金等の点で連絡をとって実施している。

3. ビデオ・テープ・レコーダー（VTR）とテレビ

ビデオテープの再生とTVからの録画（テープ化）とができる機種1台、再生専用機1台、計2台を所有している。現在の利用はビデオテープの再生が主であり、VTRはセミナー・ルームに置いてセルフ・サービス方式により学生の自主ゼミなどで利用されている。

4. マイクロ・リーダー・プリンター

16mm版ロール・フィルム（マガジン入）用のリーダー

・プリンターとして1台所有。これは閲覧室の1角に設けてあり、やはり利用者自身の操作を原則としている。当館では1974年以来、所蔵中の逐次刊行物のうち、刊行後15年経過したものを系統的にマイクロ化（自作）しているが、これとは別途に逐刊資料のバックナンバーや欠号のマイクロ化による補充作業も行なっているため、割合利用の多い機器である。

5. その他の機器

現在、図書館で所蔵せず、学内他機関（教務課、研究室等）で所有している機器として、オーバーヘッド・プロジェクターや8mm、16mmの映写機がある。図書館では館内スペースなどの問題から、これまでAV機器類については積極的に購入するどころではなかったが、来年度中に新館が完成すればAV資料室も完備される予定のため、今年度から三ヶ年計画で特別予算を組み、AV資料と機器の拡充計画がすすめられている。

V. ま と め

教材としてのAV資料の真に有効な利用にあたり、最も肝要なのは教員による有効性の認識——個々の教育担当者だけでなく、全学的教育方針としての受入れ体勢——であり、あとは実践あるのみである。洋の東西を通じ学生の多くは本来的に受け身であり、カリキュラムに無縁な紙芝居には目をくれようとししない。しかしながら生れながらにAV的洗礼を受けたテレビ世代人であり、AVの手法を受けとめる体勢はできているのである。

図書館員の役割はこの点、資料と利用者の、あるいは利用させる人とする人の間の仲介者にすぎない。その役割りは具体的にはAV資料のPRであり、たとえば目録リストの作成である。整理としてのカード目録作成とは別に、所蔵AV資料を潜在利用者たちに広く周知報告するための冊子体目録リスト——たとうすくとも——の作成と配布である。

○目録リスト作成のすすめ

上述の主旨にしたがい、さしあたり学内関係各機関の所蔵リストを作成し、学内の利用者、とくに教員向けのPRを継続的に、魅力的に行なうと次第に効果があがってくる。PRの真骨頂である口コミが機能しはじめるからである。と同時に宣伝が効いて利用者が現実には殺到？した場合誇大広告だと叱られないためにも、自館資料の充実につとめ、常にup-to-datenessを保つためにweedingも規準を設けて実行する必要がある。

○他機関の目録をも備えること

堀江（1976）⁴⁾は医学以外の資料の面についてであるが、他機関とAV資料の団体登録を行なっている実例を報告している。また Branz（1977）¹⁾は目録の重要性を力説し、利用者 medical educators と市販資料との間のインフォメーション・ギャップを克服するためには広汎なAV目録が必要であるとして、大半の市販カタログに無記載の、三項目をAV目録の三要点としてあげている。1）資料の製作年月日、2）利用対象（専門家向け、学生向けなど）、3）内容要約がそれである。

NLMAC（1978 から NLM により独立刊行）が、幸いにも上記の条件をすべて満たしてくれている目録として、年4回刊行されている。毎号約100頁、MeSHによる件名別収載（タイトル別、取扱業者別索引）、医学図書館必備の tool である。

たとえば日本医師会はフィルム、ライブラリー目録（含むビデオテープ）を有し、これに所載のAV資料は各医学図書館を通じて、各大学の授業その他の目的に借り受けることができるのである。78年5月現在の日本医師会目録には、16mm映画736本、ビデオ236本、その他のAVの資料がドクターたちの利用を待っていることを告げている。大いに利用さるべきであろう。

余力があれば、逐次刊行物の場合における「医学雑誌総合目録」のように、各医学図書館所蔵のAV資料のユニオン・リストを作ることが次の課題となろう。MLA's Annual Meeting (Honolulu, 1979) ではAV資料の図書館間相互貸借がテキサス州、ダラス地区の医学図書館間において、すでに実践中であるとの報告がなされている。

○現状と将来の動向に留意したい

AV資料はハード、ソフトともに日進月歩の産物であるから、対策や方針の確立にあたってはいたずらに古い文献をさかのぼるゆき方よりも、最新の機器、資料にたえず注意を怠たらぬ企業家的ゆき方をとるべきである。業者のカタログ等も必備資料であり、それにより新製品の研究やその影響等に留意すべきでなかろうか。

以上で小論を終るが、近い将来はJOISの端末機によりAVLINEの利用が可能になり、AVの利用は比重を増すにちがいない。かくして我が国の各医学図書館は、AV資料をも含む全記録媒体のキャンパス内における総合センターとして、教育・研究・診療に一層重要な役割を課せられることになるのである。

さいごに、本大学図書館のAVテクニシャン大石道夫氏に対

し、小論中のAV資料のハードウェア、ソフトウェアの各製品の性能、特徴について種々の有益な教示を筆者らに与えられたことを記して謝したい。

文 献

- 1) Brantz, M. H., MacIlvaine, P. M. : The need for a health science audiovisual resource list. J. Med. Educ. 52(11) : 937—939, 1977.
- 2) The Crenshaw Learning Resources Center Annual Report 1977/78, Norris Medical Library, USC Health Sciences Campus.
- 3) Guidelines for Medical School Libraries, by the Joint Committee of AAMC and MLA. J. Med. Educ. 40(1) : 29, 1965.
- 4) 堀江幸司：視聴覚教室の運営と資料；ビデオ・カセット・テープの特性。医学図書館, 23(3) : 139—146, 1976.
- 5) Hurwitz, G. H., Hampton, C. L., Shaffer, M. C. : Profile, data, and management of two learning resource centers, 1970—1978, Bull. Med. Libr. Assoc. 67(4) : 369—375, 1979.
- 6) 黒岩高明：視聴覚資料論序説，図書館短大紀要，No. 8 : 53—64, 1974.
- 7) 松村多美子：欧米における大学図書館活動，厚生補導（文部省大学局学生課編）No. 158 : 31, 1979.
- 8) 三浦茂：日本ではなぜVTRが普及しないか，医学教育, 6(4) : 284—287, 1975.
- 9) 日本医学図書館協会：
第48次加盟館統計（昭和51年4月—52年3月），1977
第49 “ （昭和52年4月—53年3月），1978
第50 “ （昭和53年4月—54年3月），1979
- 10) レンツ・スーザン（古賀節子 訳）：カルフォルニア州における学校図書館の現状，図書館雑誌, 72(12) : 610—612, 1978.